

新年のごあいさつ

「令和6年能登半島地震」では、多数の尊い命が失われました。深い追悼の意を表したく存じます。また、被災された方々に心からお見舞いを申し上げ、一日も早い健康の回復と安全で安心できる生活に戻られることをお祈りしております。

さて、昨年、国内では新型コロナウイルス感染症が5類に移行し、様々な規制や自粛等が緩和され、穏やかな日常が戻ってきました。お陰様で、教育活動も円滑に展開することができ、子供たちは充実した毎日を笑顔で過ごしております。皆様のお力添えに心より感謝いたします。

今年の干支“甲辰（きのえたつ）”は、「春の暖かい日差しが、大地すべてのものに平等に降り注ぎ、急速な成長と変化を誘う年」と言われています。本校は開校75周年を迎え、コロナ禍で陰になっていた部分にも陽が当たり、先人が築き上げてきた礎の上に、新たな成長が始まる年となる予感がします。本年も、何卒よろしくお願い申し上げます。

陰陽互根という真理

国外に目を向けると、ウクライナへの軍事侵攻、ガザ地区の戦闘など、私たちの常識から掛け離れた現実があります。今も、世界は混沌としています。

“陰”と“陽”という言葉があります。互いに対立する属性を持った二つの気であり、森羅万象、万物の生成消滅は、この二気によって起こるとされる考え方です。

陰陽互根とは、「陽は陰が、陰は陽があつてはじめて一つの要素となりえるのであって、互いが存在することで己が成り立つ」という意です。

陽と陰の二気が調和して、初めて自然の秩序が保たれるというのです。この真理に気付けば、混沌が調和となり、対立も戦争も起きないのですが…。

しかし、私たちの身近にも、混沌とした危機が迫っていると感じることが度々あります。

100点満点じゃなきゃダメですか？

卑近な例を挙げます。昨年9月、子育て応援策として寄贈された「段ボール製の授乳室」を、松江市の道の駅に設置したことについて、SNS上で批判の声が相次ぎました。

《何これ、酷過ぎて泣きそう。授乳室がダンボールって。女性の羞恥や恐怖に無頓着過ぎる。ピントずれ過ぎて言葉がない。天井開いている、カーテンちゃんと閉まらない、こんな所で安心して授乳できる訳ないじゃん。まともなスペースをちゃんと工事して作りなよ。等々》

このような批判の声に対して、違和感というか、私は大きな危機感を抱きます。

島根県知事が、直後の定例記者会見で、批判の声を一蹴しています。「100点満点のものじゃないからダメというのは間違った考え方です。100点主義で叫ぶのは構わないけど、ハードルを上げるだけで、結果的に何もできずに終わってしまう。60点でもいいです。そこから5点でも、10点でも改善して前進していけばいいじゃないですか。」と、論旨明快です。

SNS上で批判するほとんどの人たちは現実問題を直視せずに、現物すら見ておらず、課題解決とは程遠い所から、批判の声に同調しているだけに聞こえます。そもそも、それを「賛否」とか「議論」とかいう俎上に載せること自体が無意味です。

島根県知事がおっしゃった「非難に惑わされちゃいけない」の一言に尽きます。「言ったもの勝ち」の世の中にしてはいけません。「オールオアナッシング思考」は自分も相手も苦しめるばかりです。私が抱く危機感の本質はそこにあります。

おー、よしよし

「段ボール製の授乳室」を許せず全否定している人たちは、たぶん、他の多くのことも許せないのだろうと思います。例えば…。

赤ちゃんはよく泣きます。昼夜を問わず、所構わずよく泣きます。親は大変です。それでも親は赤ちゃんを抱き上げて、「おー、よしよし」と抱きしめます。この“よし”は、良い、好ましい、快いなどの意を表します。赤ちゃんが泣き続け、親はきっと困惑しているはずなのに「よしよし」と“承諾”しているのは何故でしょう？

それは、親は子の全てを受け入れ、子の全てを「良い存在」として、「おー、良い良い、何も心配しないでいいよ、大丈夫だよ！良い子だ。良い子だ。」と、全肯定しているからです。それが親の愛です。そして子は、「こんなに迷惑をかけているのに、自分は生きて存在していい、大丈夫なんだ」と、自分の存在意義を悟ります。この「自分が自分であって大丈夫」という自己有用感こそが、生きる力を感じ、健やかに育つ源なのです。

親は、子に100点満点はおろか、何も求めません。親の愛は、無条件で、一方的で、永遠なものです。「おー、よしよし」は、心の最も深いところに響く、魔法の言葉なのです。

残念ながら、公共の場などで幼子が泣いていると、露骨に顔をしかめたり、「静かにさせろ！」と大声を出したり、「みんなに迷惑でしょ」と正義感を盾にする人もいます。ここでの危機感は、「正論」という名の「不寛容」です。

自分が自分であって大丈夫

前述の「自分が自分であって大丈夫」という自己有用感は、自分と他者（集団や社会）との関係が、肯定的に受け入れられることで生まれます。人は他者を無条件で受け入れることで、自分も周りも幸せに導くことになります。

しかし、「おー、よしよし」と、自分の存在が無条件で受け入れられるという経験がないと、自分が何かをして「他者から承認されなければならない」と追いつめられるようになります。ありのままの自分ではなく、常に他者からどう見られているかが自己の行動基準となり「あれもしなきゃ、これもしなきゃ」と生き辛さを感じるようになるのです。

「何かしなきゃ」「結果を出さなきゃ」に囚われ過ぎると、何もできない自分に気付き、他者を攻撃することでしか自分の存在意義を感じることができなくなるようです。匿名でSNSに書き込むだけの人や、自分で解決しようとせず第三者に苦情を言うだけの人は、自他の存在を前提としない評価であり、社会性に結び付くものではありません。

褒めることは、認めること

さらに付け加えると、「おー、よしよし」は、泣いている子をただ褒めている訳ではありません。褒めているというよりも、“認めている”と言った方が正しいかと思います。人には、褒められたいより、認められたいという気持ちが強くあります。一定の基準を超えた時に褒めるという行為があるとすれば、基準に満たない場合は叱咤激励になってしまうからです。

また、基準に達していないのに、むやみに褒める行為は、自尊感情を逆なでします。さほど努力もしていないのに「よく頑張りましたね」と褒められても、うれしくも励みにもなりません。実際の行動と向き合い共感し、どこまで達成できたかを認め、褒めることが大切です。

本校では、子供たちが「何かしなきゃ」という抑圧に支配されることなく、自他ともに「よしよし、大丈夫だよ」という心持で互いの存在を肯定し、認め合える校風を醸成して参ります。

結びに、新しい年が皆様にとりまして明るく実り多き年になりますよう心からご祈念申し上げます。年頭のご挨拶とさせていただきます。